
熱に浮かされ、夢を見る。

飛海 ガクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熱に浮かされ、夢を見る。

【Nコード】

N3017J

【作者名】

飛海 ガクト

【あらすじ】

FF4のエジカイです。セシル↓エジカイ。愛されエッジ。幸せ短編です。

サイトから持ってきた物そのままです。

（前書き）

エッジが熱を出してカインが看病する話です。

期待されてたかもしれませんが、エロとかありません……（笑）

「おい、エッジ……もう中に戻ってきたらどうだ？」

カインは困った顔をして、窓から顔を出し天を仰いだ。
降り注ぐ雨が、容赦なくカインの頬を叩く。

「エッジってばあ……」

カインの声は雨の音に吸い込まれ、エッジの元までは届いていない様だった。

しかし、忍者の彼が、声を聞き逃すなどするだろうか。
きつと無視しているんだろう。カインは気付く。

仕方がないので、長い雨で足場が悪いが、カインはエッジが居る
筈の屋根へ飛んだ。

「……エッジ」

「お、カイン。どうした？」

ザアアア、と激しい雨の音がエッジの声をかき消す。

カインは近付いて、さつきと同じ体勢で、飽く事なく空を見上げる
エッジの隣に座った。

「どうしたも、何も……こんな所に居たら、風邪を引くだろう」

其の言葉に、エッジは一瞬呆け……間、ぷつと吹き出す。

「何だ？ エッジ」

吹き出しただけでなく、笑い転げるエッジに、カインは不機嫌そ
うに眉をしかめながら訊いた。

しかしエッジは笑っており、答える事が出来ない。

「おい、エッジってば……」

何か変な事を言っただろうか、とカインは自身の言動を思い返す。

……しかし、当然の事ながら、心当たりが有る筈もなかった。

「！ エッジー！」

と、フと目を上げると、エッジがバランスを崩す。

屋根の縁から10m近く下の地面に落下しそうになっ

慌てて手を伸ばすが、伸ばされた手にカインの手は届かなかった。

「エッジ……っ！」

カインは鋭く名前を呼んで、飛び降りる。

空中でエッジの手を捕まえたカイン。

しかし、着地の体勢に入る間もなく、衝撃が足を伝わった。

「……っ」

「エッジ！」

エッジは不時着の打撃をモロに食らったらしく、苦しげに呻く。

「おい、エッジ、大丈夫か!？」

どうやらエッジは、共に落ちてきたカインを庇おうと、カインの手を引いたらしかった。

自分を犠牲にしてか？ 何を馬鹿な事を……。

カインは労りの言葉の後、罵ろつと口を開く。

「なーんてなっ」

「っ!？」

バツとエッジは起き上がり、其の拍子に未だエッジの上に乗ったままだったカインは後ろに倒れかけた。

しかし、エッジはカインの腰に手を回し、抱き寄せる。

「平気だったか？ カイン」

「俺は平気だ。其れよりお前は……」

「俺を何だと思ってる？ 受け身くらいとれるさ」

エッジは明るく笑った。

お前が無事で良かった、と。

ぬかるみに落ちたのが幸いだったか。エッジには傷は見えなかった。

「……心配させるな、馬鹿」

エッジと向かい合って膝に乗る形で、カインは呟く。

其の腕はしっかりとエッジの首に回されていた。

「ごめんごめん。でも……其れを言うならお前も危なかったろ。何だっで一緒に落ちてくるんだ……?」

俺1人だったらこんな事もなくて済んだのに、とエッジは愚痴る。

しかし其の目には責める様な色はなく、ただ優しい色をたたえていて。

ああ、本当に愛されているんだな……と。

カインは思った。

「……つくし」

「……風邪引いたな。こんな雨の中に、いつまでも居るからだぞ？」
「大した事ないって、これくらい……」

上手く話を逸らせたど、カインはエッジの額に右手を当てる。

その場しのぎという理由だったのだが、右手の違和感にカインは顔をしかめた。

「ん？ どうした、カイン……」

「お前……凄じ熱じゃないか」

驚きと呆れの混じった声。

しかしエッジは、その言葉に答える事はなく。

フと微笑んで、グラと崩れた。

「……馬鹿」

カインは氷と水を入れた袋を持ってきて、そう呟いた。

自分の部屋で眠る人。

……さっき、自身を犠牲にしても自分を護ってくれた人。

ハアとカインは溜息を吐く。

「お前……もう、本当に馬鹿なんだから……」

どうして一緒に落ちてきたんだ、俺1人だったら大丈夫だったのに、と彼は言った。

しかし、其の理由はカインも知らない。

何故自分も追う必要があったのか。上から安否を確認すれば済む

話だったのに。

彼が忍者だという事を知らなかったわけではない。其の瞬間も覚えていた。

……しかし。

「言えるか、馬鹿……心配だった、なんて……」

致命傷を負ったかどうかすらも分からなかったんだ。

後から飛び下りれば良い？ そんなのは嫌だ。

自分の所為だと永遠に自己嫌悪する羽目になるだろう。

無防備な寝顔を惜しげもなくさらす彼に、カインは内心毒づいた。

「……でも、良かった……無事で……」

言って、カインは彼の額に口付ける。

唇からも、とても熱いのが分かった。

ずっと持っていた氷の袋を、彼の額の上に乗せる。

そして冷えた手で、彼の首筋に触れた。

「……ん……」

「エッジ……」

雨の所為だけでなく暗い空。

カインらが部屋に戻ってきてから、まだ1時間も経っていない。

ひどくどんよりとした空だ、夜中だからか、とカインは思った。

未だ誰も起きてこないといいけど、とも思う。

そして、そう考えてから、カインは小さく溜息を吐いた。

……起きてこなければ良い、なんて。

永遠に自分と彼の2人だけの時間が続けば良い、なんて。

どうせこの部屋は、自分と彼の2人だけで使わせてもらっている

のに。

カインは己の浅ましさに、自嘲的な溜息を吐いた。

朝日が寝不足の目に痛い。

いつの間にか寝てしまったのか、とハとカインは顔を上げる。

しかしベッドの上には眠ったままのエッジが居た。

「エッジ……」

額の上に乗せてあつた筈の氷の袋はいつの間にか落ち、シーツを水で濡らしている。

……一体、どれくらい眠れたというのだろう。

カインは筋肉痛の身体を解す様に、水の袋を手に取り備え付けのキッチンの方へ歩いていった。

作り置きの水も、もう殆どない。

そんなに使ってしまったのだろうかとかカインは思う。

少しでも良くなっていると良いけれど、とかカインは氷と水の袋を持ってまた戻ってきた。

「……カイン？」

「エッジ」

熱の所為で焦点が合わないのか、虚ろな目で言うエッジ。

しかし自分の存在は認識されていたらしい。素直に嬉しい事だ……。

そんな事は勿論口に出す筈もなく、カインはエッジの傍へやって来た。

「どうだ、具合は？」

「俺、何で……」

「熱。昨日屋根から落ちたの覚えてるか。あの後お前、気を失ったんだよ」

そうだったのか、とエッジは呟く。

あれは気絶も同然だったなとかインは回想した。

「で？」

「ん……寒い、し、だるい。動きたくない……」

カインがエッジの額に触れてみると、成程、昨日程ではないがまだ熱かった。

寒いのならまた熱が上がりそうだな、とかインは眉をしかめる。自業自得だと思っではいたのだが。

「腹は」

「減った……けど、食べたくない……」

「食えるものがあるんだったら、買ってくるけど」

「いや、良い……」

弱々しく呟いて、エッジは目を閉じた。

呼吸が荒い。辛いのだと、カインは知る。

しかしどうもしてやれない辛さがカインを襲った。

熱を下げる様努力し、せいぜい手を握ってやる事くらいしか出来ないなんて。

「じゃあ、もう一度寝ると良い」

傍に居てやる事しか出来ないけど、とカインは囁く。

「や、其れだけで良い……傍に居てくれ……」

布団の中から、エッジの手がカインの其れを探した。

意図が分かって、カインはエッジの手を握り返す。

エッジは力が入らないのか強くは握ってこなかったが、此処に居ると、確かに主張する様で。

大丈夫だ、お休み、とカインは言う。

「有難う……カイン……」

エッジはそう言って、直ぐに眠りに落ちた。

カインは暫く手を握ったまま、エッジを見ていた。

「ねえカイン、エッジは!？」

ダンドン、と激しく扉を叩く音で、カインは目を覚ます。

……また寝てしまった。馬鹿は俺か、と自己嫌悪気味なカイン。

しかし煩い奴だと覚醒直後の覚めきらない頭で思った。

「カインってばーっ!!」

セシルの声が、扉越しにもガンガン響く。

エッジが起きたらどうするんだ、とカインは吐き捨てたが、セシルの所まで届く筈もなく。

今にも扉が破られそうだ。軋んでいる。

……と思った瞬間。

「エッジー！」

最後だけ違う人の名を呼び、セシルは扉を吹っ飛ばした。

おいおい、宿屋の扉だぞ……とは、カインは言えず。

愛の力は偉大だな……としか、思えなかった。

「えっ、ちよっ、カイン、エッジどうしたの！？」

「煩い。静かにしろ。熱が有るんだ」

「えっ、熱っ！？」

余程口にタオルでも詰めてやろうか、とカインは思った。

どうしていちいち煩いんだ、コイツは……。

「ねえ、カイン、エッジ大丈夫なの？」

「煩い」

「カインってば……」

「煩い。静かにしたら教える」

エッジが起きるだろ、とカインが小さく叱責すると、セシルはハ
と気付いて口をつぐむ。

そして無言で先を促した。

「昨日の夜中くらいから、熱が有るんだ……測っていないから良く
分らないが、38度は有るんじゃないか」

カインがそう言つと、突然背後で息を呑む音が聞こえた。

「そんな……エッジ、大丈夫なの？」

「リディア、ローザ……」

心配そうに顔を歪めるのは、同じパーティーの女性達である。

セシルよりは物分かりが良くて、カインは安堵した。

「今日も、大して下がってないみたいで……氷も使い尽くしたし、
何も食べてないし、不安なんだ」

何も食べていない、というのは、エッジが、という意味で使った
のだが。

瞬間、カインは自身も何も食べていない事に気付く。

「ところで今は何時なんだ？」

「今？ 今はねー……2時よ」

「2時？」

昼のだろうか、とカインは当然の事を思った。

そういえばセシルに起こされる前は……10時だったなど。

4時間も眠っていたのか、とやはり自己嫌悪。

自分が起きていて、エッジを支えなくてはいけないのに、と。

「……るさい」

「エッジ」

エッジは辛そうにまぶたを持ち上げて、そう呟く。

「エッジ、平気か。今飲み物を持って来るから……」

「すまない、カイン」

「気にするな」

そう言っただけカインは、即その場を立つた。

握られていた手が暖かい、とエッジは思ったが、瞬間。

ずっと握っていてくれたのか、と知る。

「ほら、エッジ」

「ああ、有難う」

水の入ったコップを受け取り、エッジは一気に飲み干した。

水道水だろうが構わない。今は、喉が渴いているのだと。

どうして4時間前、自分は飲み物の事に気付かなかったのだろう、とカインは思った。

「エッジ、ねえ、大丈夫？ エッジ！」

セシルはまた布団に潜り込んだエッジに、しつこく声をかけている。

「煩い、とエッジに言われるまで。」

「エッジいい……」

「煩い。静かにしてる。エッジの熱が上がる」

泣き付くセシルに、カインは言い捨てる。

「……出てけ」

エッジのいっぴくなく低い声が、一瞬沈黙した部屋に突き刺さった。ローザとリディアは既に腰を浮かしかけていたので、セシルを引

っ張って外へ出る。

そして、カインも其れを追おうとして立ち上がりかけたのだが。

「カイン……お前は、居てくれ……」

「エッジ？」

服を掴まれ、悲痛な声で言われ、カインは振り返る。

其の瞬間、セシルが言おうとしたのだが、其れをローザとリディアに遮られた。

「そうね、其れが良いわ、カイン」

「そうよ、エッジのお世話をしてくれる人が居なきゃ困るじゃない」

「そ、其れはそうだが……」

「大丈夫、カインなら出来るって！」

そう言って、リディアは意味有りげにウィンクする。

エッジとローザはどうやら其の意味が分かったらしく、一つ頷くと。

「じゃあカイン、何か有ったら呼んで。私達にしか出来ない事も有ると思うから……」

「え？ ああ……」

其れくらいなら2人が残れば良かったのに、とカインは思ったが、其の瞬間は肯定の言葉のみを口に出す。

……もつとも、そう思ったのは、扉が閉まってから数秒後の話だった。

「……エッジ」

あまり喋ってほしくない、無理をしないでほしい、と思いながら、カインはエッジに話しかける。

「ん？」

「あのさ……」

エッジは目を閉じたまま返事をした。

カインは呟く様に問う。

「何で……俺だけ、部屋に残したんだ？」

セシルはともかく、ローザとリディアなら……と。

看病も大してした事のない自分を残すメリットなど、有るのだからか。

カインはそう考えていた。

「……暇だったから」

「はあ？」

エッジの口から出た、いとも単純な答えに、カインは問い返さざるを得ない。

「冗談。俺は……」

ちよつと笑つて、エッジはカインに向かって手招きをした。

カインは疑いなくエッジの口元に耳を近付ける。

「……………っ」

「はは」

そして直ぐ、バツと退いた。

エッジはそんなカインの反応を楽しむかの様に、笑っている。

しかしカインは、いたつて本気だ。

「な……んで……………」

からかっているのだと、カインは思っていた。

皆に愛されるエッジが、自分に執拗に構ってくるのは、ただのからかいだと思っていた。

1つの遊びで、どうせ直ぐに飽きる、そんなモノだと思っていた。しかし……。

「冗談じゃねーからな？ 本気にしろよ、カイン」

渴いた喉が紡ぐ、掠れた低い声が、カインの鼓膜を震わせた。

其れだけで、カインの頬にはカアと朱が差す。

「…………… 心臓に、悪い」

「そうか」

熱などないかの様に、エッジは笑った。

そうして居ると、健常者にしか見えない。

……病気だ、という事が、『健常者ではない』に繋がるのかどうかは、定かではなかったが。

「じゃ、俺はもう1回寝るかな……」

カインの返事も待たず、お休み、とエッジは言う。

勿論カインも、返事をする気などサラサラなかったが。

……ただ、ひたすら、驚いていた。

「お前が好きだから」

……なんて、言われたから。

其れは、カインの方が早かった。

カインの方が数日早く、エッジへの想いを認識していた。

『like』から『love』へと。

変わった瞬間を、カインは未だ覚えている。

エッジはセシルからも、ローザからも、リディアからも慕われていた。

セシルに至っては、エッジに特別な想いさえ抱いていた様で……。気付かない振りをしていたのか、気付いていたのに平気だったのか。

そんな事はもう、カインも忘れてしまった。

ただ……。

最初は平気だったのに、いつしかエッジを特別に想う様になって。そうして初めて、セシルが『邪魔』だと思った。

エッジが自分を気にかけてくれている、というのは、普段の行動でカインは良く知っていた。

だからこそ、エッジに付きまとう彼が憎くてたまらなくて。

カインは幼馴染みに、戦友に、言いようのない感情を抱いていた。そして、さつきも……。

しかし、全てはさつきのエッジの言葉で霧散していた。
「好き」。

初めて貰った、認めの言葉。

カインは其れに、どうしようもない不安を覚えていたくせに、同時に安堵も覚えていた。

そして。

改めて、自分の、エッジへの想いの強さを知った。

「……俺も好きだよ、エッジ」

「な、カイン、平気か？」

「……煩い……黙ってる……」

エッジの問いに、カインは呻く様に答える。

低い声が掠れて更に聞き取り辛くなり、かなり耳障りだろうに、エッジは飽く事なくカインに話しかけていた。

……しかし、カインの方は迷惑そうである。

「まさか、俺の風邪が伝染っちゃうなんてな……やっぱり、誰かにかければ治るのか」

エッジはそう、嬉しそうに呟いた。

「うるさ……」

耳元の声に、カインは眉をしかめる。

熱が高い所為で、頭にガンガン響くのだ。

ただでさえも、エッジの声は大きくて響くのに……。

「ああ、ごめんごめん。じゃ、今は寝てろよ」

「……ん……」

エッジは苦笑しながら離れる。

カインは漸く安心して、寝ようと目を閉じたのだが。

「ん？ どうした」

何かが足りないかと、直ぐに目を開けるカイン。

そして、気付いて。

分かれよ……と、視線で訴える。

「ああ……人肌恋しいのか」

気持ち分かる、と言って、エッジはカインの右手を握った。

熱だけでなく嘔吐でも弱り、強く握られたままの右手を解される。そうした上で、握られたのだった。

「大丈夫……俺が、傍に居るから。安心して寝ろよ？」

「……エッジ……」

こういう時だけ大人に見える、と熱でばやけた頭でカインは思う。そう……こういう時だけ。

「……有難う」

カインはぽつりと呟いて、握り返して、直ぐに眠りに落ちた。

そしてエッジは、そんなカインの右手を握ったままで。

空いた手で、金の長い髪を梳いた。

（後書き）

個人的にカイン以外が愛されてるって珍しいのですが、でも最終的にカインも愛されてます（笑）

ここまで読んで下さって有難う御座いました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3017j/>

熱に浮かされ、夢を見る。

2010年10月8日15時13分発行